山陰地方の舟と水上交通～青谷上寺地遺跡出土資料を中心として～

君嶋　俊行（鳥取県埋蔵文化財センター）

青谷上寺地遺跡出土の舟

山陰地方の出土舟資料については、近年、鳥取市青谷町に所在する国史跡青谷上寺地遺跡において大幅な増加をみており（君嶋編 2012）、弥生時代の舟研究に新たな理解をもたらす内容を含んでいる。青谷上寺地遺跡は弥生時代を中心に繁栄した集落遺跡であり、三方を山に囲まれた青谷平野に立地する。弥生時代の青谷平野には潟湖（古青谷湾）が広がっており、青谷上寺地遺跡はこの内湾に臨む港湾集落であった。

青谷上寺地遺跡の実船資料は約 50 点に及び、船首の形状によって大きく２種類に分けられる。

Ⅰ型　平面形は舷側から船首にかけて内湾するカーブを描いて大きく幅を減じる。舷側縁には貫通孔を有する。Ⅰ型である第１図１は、船首へ至るカーブと孔の位置が大型船として知られる久宝寺遺跡（大阪府）出土竪板型準構造船とほぼ一致することから、Ⅰ型は久宝寺出土船と同形態の竪板型準構造船となる可能性が高い。

Ⅱ型　約 30 点の船首破片が確認されており、量的に青谷上寺地遺跡の舟の主体を占める。以下のような特徴を持つ（第２図）。

①船首の先端は、舷側から大きく幅を減じることなく、平面四角形に丁寧に加工される。

②船首は大きく反り上がる。その角度は底面の反り上がり開始位置で 10° 前後、先端付近では 20° ～ 25° となる。

③舷側上面は丸く収め、舷側板を載せるための加工が見られない。

④船内は二段に刳り込まれる。

⑤船首に方形の貫通孔（先端の縦孔）を持つ例が多い。この縦孔は左右１対で設けられたことが推測される。

⑥船首の底面側に、四角形の刳り込み（裏刳り込み）を持つ例が多い。貫通孔と刳り込みの位置関係にはバラエティーがある。なお、先端の縦孔と裏刳り込みの位置関係は多様であり定型化していないことから、両者はそれぞれ機能を異にするものと考えられる。

⑦船首の破片から原木の径を算出し本来の幅を復元し、既知の資料の長幅比を参考に長さを算出すると、Ⅱ型の船の多くは長さ６～ 12 mに復元される。

上記の特徴のうち①②については、「貫型準構造船」の特徴と一致するが、舷側上面に舷側板を載せるための加工が認められないという③の属性を重視するならば単材丸木舟ということになる。

青谷上寺地遺跡では、実船資料の他、８点の模型資料（舟形木製品）が出土しており、その形態は先述した実船資料に対応する形で２類型に分けられる。Ⅰ型を模したと考えられる模型（第３図１）の船首には竪板を嵌めこむ斜めの溝が表現されていること、Ⅱ型を模したと考えられる模型（第３図２）の舷側には舷側板を綴じるための孔が表現されていないことは、Ⅰ型が竪板型準構造船であり、Ⅱ型が丸木舟であるという先の推測を補強する状況証拠となる。

青谷上寺地遺跡における舟の利用景観

青谷上寺地遺跡において量的に主体を占めるのはⅡ型の丸木舟であり、これに少数の竪板型準構造船（Ⅰ型）が加わる組成となる。それぞれの所属時期について、模型を含めて整理すると、後者は弥生時代後期以降に認められるのに対し、前者は中期段階から存在する。弥生時代後期以降、大型船は

準構造船、中・小型船は丸木舟という構造の異なる舟が使い分けられていた点が、青谷上寺地遺跡の特徴であり、大型船から小型船まで竪板型準構造船が多用された琵琶湖沿岸とは異なる様相である（第１表）。このことは、縄文時代以来スギの大径木が入手しやすい環境にあり、強度に優れる丸木舟が好まれた結果と評価できよう（横田 2012）。

青谷上寺地遺跡の丸木舟の系譜

Ⅱ型の丸木舟は極めて規格性が高く、かつその形態は縄文時代の丸木舟と大きく異なる。船首・船尾が大きく反り上がる船形については、日本列島内外の絵画資料にいわゆる「ゴンドラ型」の舟が多く描かれており、外来要素である可能性も考えられる。船内を二段に刳り込む類例は、青谷上寺地遺跡以外には目久美遺跡（米子市）出土例のみが管見に及んでいる。模型資料では八日市地方遺跡（小松市）に同様の特徴を持つ例があり、北陸地方に船内を二段に刳り込む実船が存在したことを示唆する資料と言えよう。なお、これら２例は、船首の反り上がりはさほど顕著ではない。「船首（船尾）の反り上がり」と「船内の二段の刳り込み」は別個の系譜を持つ属性であり、それらが青谷上寺地遺跡において融合したのが、Ⅱ型の丸木舟であると考えられないだろうか。

まとめ

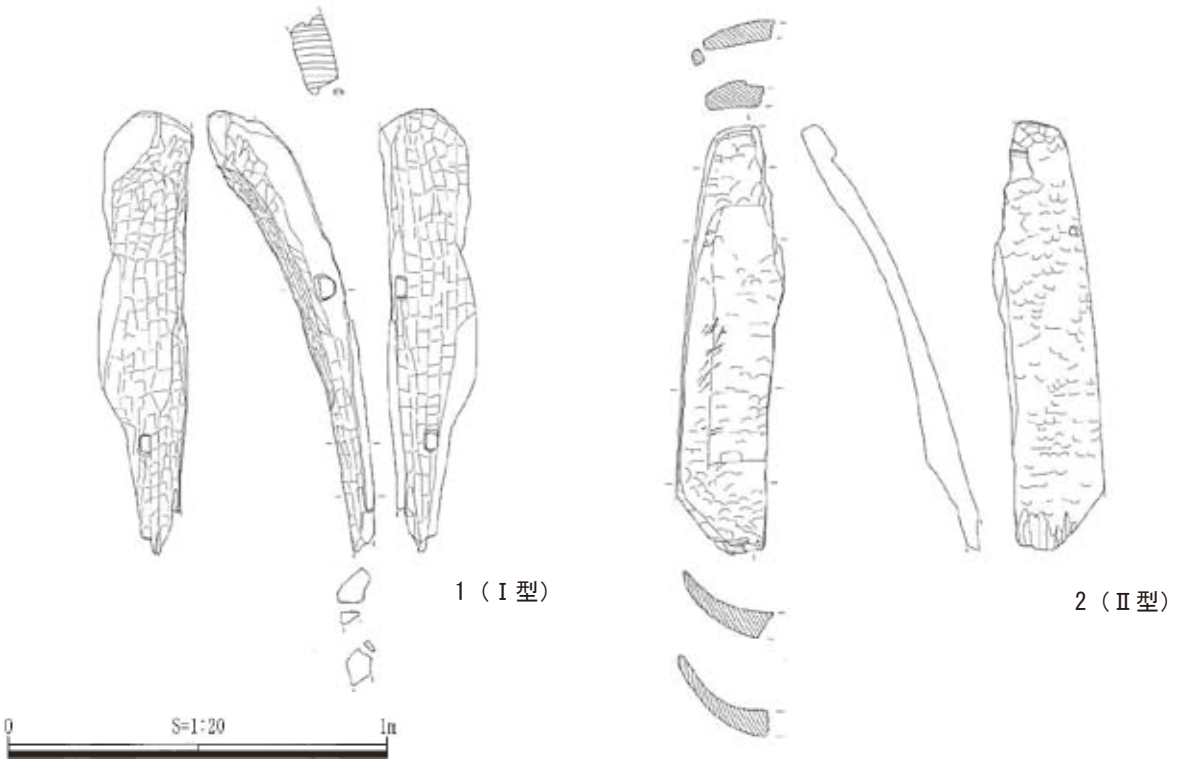
内湾に臨む港湾集落であった青谷上寺地遺跡では、大型の竪板型準構造船と、中・小型の特異な形態の丸木舟とが存在した。丸木舟の系譜を明らかにすることは今後の重要な検討課題であるが、船内を二段に刳り込む特徴については、北陸地方の舟にも存在する可能性がある。山陰と北陸との頻繁な往来を背景に、丸木舟に「地域型」が成立した可能性は充分に想定し得る。そしてこのことは、弥生時代後期以降に盛行した準構造船が画一的な構造を持つことと表裏の現象として評価する必要があろう。いずれにせよ、青谷上寺地遺跡独特の丸木舟は、実態の不明瞭な貫型準構造船と密接な関係にあることが予想され、その構造や系譜を明らかにするうえで重要な資料である。

なお、研究集会の資料では山陰地方の海岸地形や縄文時代の丸木舟、古代の水上交通についても触れたが、紙幅の都合で割愛する。

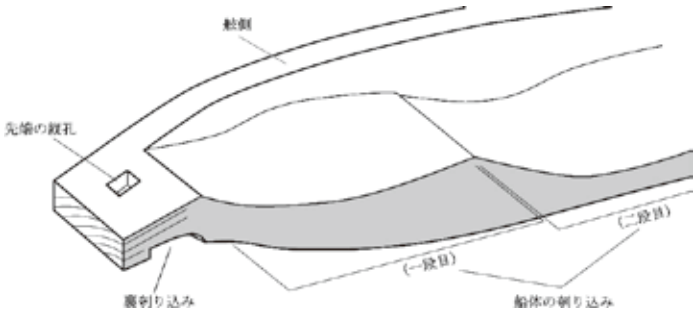
【引用・参考文献】

君嶋俊行編　2012 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告８　木製農工具・漁撈具』鳥取県埋蔵文化財センター
佐伯純也編　2003 『目久美遺跡Ⅷ』財団法人米子市教育文化事業団
塚本浩司編　2013 『弥生人の船　モンゴロイドの海洋世界』大阪府立弥生文化博物館
中川　寧　2009 「山陰の船～出雲市五反配遺跡の竪板と考えられる木製品～」『木･ひと･文化～出土木器研究会論集～』出土木器研究会
中原　斉　1998 「山陰の丸木舟」『考古学ジャーナル』№435、ニュー・サイエンス社
錦織　勤　2013 『古代中世の因伯の交通』鳥取県史ブックレット 12、鳥取県
深澤芳樹　2003 「弥生時代の船、川を進み、海を渡る」『弥生創世記』大阪府立弥生文化博物館
福海貴子・橋本正博・宮田明編　2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
横田洋三　2004 「準構造船ノート」『紀要』第 17 号、財団法人滋賀県文化財保護協会
横田洋三　2007 「弥生時代の舟」『海と弥生人～みえてきた青谷上寺地遺跡の姿～』鳥取県教育委員会
横田洋三　2012 「青谷上寺地遺跡出土の船」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告８　木製農工具・漁撈具』鳥取県埋蔵文化財センター

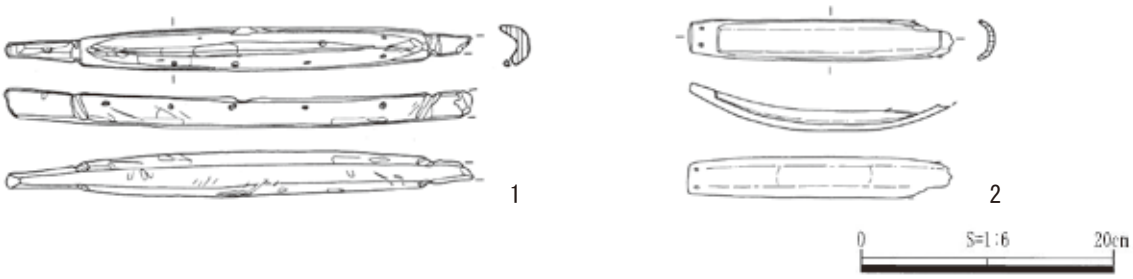
【挿図の出典】第１・２図（君嶋編 2012）
第３図１（鳥取県教育文化財団 2001『青谷上寺地遺跡３』）、２（同 2002『青谷上寺地遺跡４』）



第１図　青谷上寺地遺跡出土の実船資料（S=1/20）



第２図　Ⅱ型丸木舟の模式図



第３図　舟形木製品（S=1/6）

第１表　青谷上寺地遺跡における船の利用景観（横田 2012 を基に作成）

舟のタイプ	大きさ	使用場所	用途
竪板型準構造船（Ⅰ型）	20m 級（大型船）	外洋	遠方沿岸（九州～北陸）、朝鮮半島との交易
丸木舟（Ⅱ型）	12m 級（中型船）	近海	外洋魚の捕獲、近隣沿岸集落との交通手段
	６m 級（小型船）	潟湖・水路	漁撈・運搬・農耕用